

ストレンナ 2020

「みこころが 天に行われるとおりに、地にも行われますように」

(マタイ 6,10)

「誠実な社会人、キリストに倣う者」¹

備考：2019年ストレンナの解説を、トリノのヴァルドッコでサレジオ家族に紹介していたとき、すでに2020年ストレンナの草稿を求める人たちがいました。世界の一部の教育・司牧の年度の始まりに合わせて、次期ストレンナがほしいとのことでした。

喜んで次期ストレンナを知らせたいと思いますが、これはあくまでも概要、要点を示す草稿です。黙想し、内面化された、落ち着いた考察をもって、これを発展させることになります。それはできるかぎり、深いものであると同時に理解しやすいものにしたいと思います。

ストレンナが私たちにとって、これからも世界のあらゆるところで、新年の司牧的導きにおける中心的な指針をもつ助けとなることを願っています。皆さんに祝福を送ります。

5月にトリノで行われたサレジオ家族世界評議会の会合の後、ストレンナ2020として、対を成す形でサレジオ教育の神髄を表すテーマを提起することにしました。私たちはこれをドン・ボスコ自身から受けました：少年少女たち、若者たちが「良いキリスト者、誠実な社会人」になるのを助けることです。私たちは、福音宣教者、信仰の教育者としてのアイデンティティをますます深める必要があります。

若者のための使徒、宣教者となることにおいて、弱さ、時には無力な状況が広がりつつあります。同時に、社会人としての責任、社会正義、福音的価値のしっかりとした意識を若者に教育しないという危険があります。その意識は、生き方のプログラムとして、他者への奉仕、公共生活への責任、人としての誠実さ、あらゆる腐敗に対する“アレル

¹ ドン・ボスコの言葉では、「良いキリスト者、誠実な市民／社会人」。教会以外の、非キリスト者が多い事業所では『よいキリスト者になろう』という意味の言い方を標語として出すのは難しい」ということで考えられた邦訳。よいキリスト教信者になろう、ということではなく、イエス・キリストが示した価値観を大切にし、生きる者になろう、ということになる。

ギー”、移住の世界に対する感受性、贈りものである「皆の家」をつくること、無力な人、声なき人、打ち棄てられた人を守るために献身することなどを内面化させます。

私は思います：こういった価値を教えられないなら、私たちは何をしようとしているのでしょうか？ イエスの名によってどのような福音宣教をしているのでしょうか？

したがって今日、この教育の取り組みは、イエスの言葉：「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」² の表現となります。これこそ、今もこれからも、ドン・ボスコのまことの「主の祈りの政治 (politica del padre nostro)」なのです。

0. ドン・ボスコの「主の祈りの政治」とは？

ここでドン・ボスコにとっても直接的に結びつき、当時の社会・政治・教会の状況の「中に生きた」ドン・ボスコの生涯の、最も注意を払う必要のあるテーマに触れることになるので、この主題について私たちの情報源となる資料が何を語っているか、目を向けることが重要だと思います。ドン・ボスコにとり当時の“ポリス(polis)”（ギリシアの都市国家、すなわち、ドン・ボスコの時代の社会）に関わるのがどのようなことだったのか、明確に理解することが必要です。ドン・ボスコの大いなる「はい」とゆるぎない「否」についてです。それはもちろん、そのままでは私たちの文脈に移し替えることのできないものです。

今年のストレンナは、若者たちの中で、その暮らす社会、急激な変化にさらされた社会で生きていくために若者たちを備えさせるという意向をもった、ドン・ボスコの考え、ドン・ボスコの行動、活動の仕方を再構築させてくれます。その社会は産業革命のただ中にあり、貧困が多くの人にとり極限に達していました：計り知れない社会的、経済的な格差、物乞いをする人々の現象、“移住者”の子どもたちが遺棄されていました……これが19世紀のイタリアでした。

- a. 『メモリエ・ビオグラフィケ』以来、1867年の教皇ピオ九世との会談の際にドン・ボスコが用いた「主の祈りの政治」という表現は、よく知られています：

ドン・ボスコがピオ九世の前に現れるやいなや、教皇は笑顔で語りかけた：

「あなたなら、どのような‘政治’でこれほどの多くの困難を切り抜けますか？」

「私の政治は - とドン・ボスコは答えた - パパ様、あなたの政治と同じです。主の祈りの政治です。主の祈りの中で、私たちは毎日、天の父のみ国が地上に来るよう

² マタイによる福音書 6,10.

に、すなわち、ますます広がるように、ますます感じられ、生きたものとなり、ますます力強く栄光輝くものとなるようにと嘆願します：*Adveniat regnum tuum* (み国が来ますように)！ いちばん大事なのは、み国が来ることなのです。」³。

- b. いずれにしても、私たちが深く、そのあらゆる意味において理解しなければならぬこの確信は (ストレンナ解説でそれをしたいと思います)、ドン・ボスコのほかの考えによっても照らし出されます。次のような考えです：

「私たちは事業によって実際に政治を行うわけではありません；私たちは既存の権威を尊重し、守るべき法律を順守し、税金を払い、そうしてやっていきます。ただ貧しい若者のために善いことを行い、若者の魂を救うこと、それだけをさせてほしいと願うのです。自分たちが望むなら、私たちも政治を行います。しかし全く無害な、むしろどの政府にとっても益となるような方法で行います。政治とは、国家をよく治める科学、術として定義されます。さて、イタリア、フランス、スペイン、アメリカ大陸と、オラトリオは根づいたすべての国で、特に最も助けを必要とする若者の苦しみを和らげることを実践しながら、非行少年や浮浪者の数を減らし、つまらない犯罪に走る者や泥棒の数を減らし、刑務所を空にしていこうとしています。一言で言えば良い社会人を育てようとしているのです。良い社会人は公的権威をわずらわせるどころか、社会の秩序、穏やかさ、平安を保つために、その支えとなります。これが私たちの‘政治’です；これまで、私たちはそのことだけに取り組んできたのであり、将来もそうです。まさにこの方法によって、ドン・ボスコはまず皆さんのために善いことを行うことができ、今後、あらゆる時代、あらゆる国のほかの多くの若者のためにも善いことを行うことができるのです。」⁴。

- c. まさにこの“政治”こそ、子どもたちの善益のため、新たな持続する緊急事態に効果的な応答をするようドン・ボスコを動かしました。

1. キリストに倣う者

- ✓ 主への信仰のうちに、聖霊の導きのもとで生きる

³ MB VIII, 594

⁴ G. BOSCO, *Parlata agli ex allievi*, in ISS, *Fonti Salesiane. 1. Don Bosco e la sua opera. Raccolta antologica*, LAS, Roma 2014, 106-107.

エフェソの信徒への手紙に、私たちが招かれている愛のすばらしさ、偉大さを表す箇所があります。私たちはいかなる状況に遣わされても、その地平を決して失ってはなりません。「すべての人のいのちの内に、いのちの前に、その招かれている終着地として与えられている尊厳と神聖な偉大さを、何ものも奪うことはできません」。この言葉を語っているのがパウロであることは、さらに私たちを励ましてくれます。パウロの前に広がっていたのは、いまだすべてが異邦の世界でした：

こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるよう。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるよう。⁵

- ✓ 私たちに語られる神に耳を傾けながら生きること。告げられることを生きる。福音を宣べ伝え、初めて耳にする人に告げ、カテキズムを教える必要と共に。

「私たちの会の始まりは、ささやかなカテキズムの教えでした」⁶。この言葉は、私たちの起源、根本へと立ち帰らせてくれます。私たちはドン・ボスコから、すべての子ども、すべての若者をイエスとの出会いへ導く福音宣教の情熱を学びました。そのため私たちは、若者の福音宣教者であるのをやめることは決してできません。「福音化は、一人ひとりと彼らに対する主の計画に真摯に向き合う姿勢をもちながら、成長の歩みを目指している」⁷と知っているからです。

若者の教育者、福音宣教者であるということは、私たちが自らの体験から、神が若者たちを愛しておられること、「神にとってあなたは本当に大切に、取るに足らないことなどなく、あのかたにとっては大事な存在」⁸なのだということを、言葉、

⁵ エフェソの教会への手紙 3:14-19.

⁶ MB メモリエ・ビオグラフィケ IX, 61

⁷ 使徒的勧告『福音の喜び』EG 160

⁸ 使徒的勧告『キリストは生きている』ChV 115

立ち居ふるまい、行動によって語ることができることを、何よりも私たちに求めます。

✓ 今日、サレジオ霊性を備えたまことのキリスト者、教育者であること

- 日常生活において神の霊性を強調すること。
- サレジオ霊性の生き方をもって。教育者と若者の友情の雰囲気、一人ひとりの成長に大きく役立つ場で。聖フランシスコ・サレジオの伝統において、信仰のうちに成長することは、導き手の助けがあったとしても、真の友情がなければ不可能です。すなわち、コミュニケーション、互いに影響を与え合うこと；真に霊的なものとなる友情。
- 「サレジオの養成者と若者の関係は、『最も大いなる誠実さ』のあるものでなければなりません。なぜなら、『親しみは愛をもたらし』、愛は信頼をもたらすからです。このようにして心は開かれ、若者は恐れることなくすべてを打ち明けることができるのです（……）。なぜなら、愛されていると確信しているからです。」⁹

✓ キリスト教でない環境に生きるという挑戦における「キリストに倣う者」

- イエメンで 557 日間、囚われの身となっていたサレジオ会員トム・ウズンナリル神父のあかしは、人間的に極限の状況の中で、霊的な内面性と信仰によってトム神父がいかに「心と精神において健康」でありつづけることができたか、証明しています。沈黙においてさえ、トム神父は生き方をもってあかししました。
- 預言的な対話、あかしを生きることができること。

✓ 信仰という前提あるいはキリスト教的環境が過去のものとなった社会の挑戦における「キリストに倣う者」

- これは何よりも、私たちサレジオ家族が教会に差し出すことのできる尊い贈りもの、教会と世界が私たちに求める挑戦です。カリスマにおける家族として、ほかの信仰

⁹ A. GIRAUDDO 154, G. BOSCO の言葉を引用, *Due lettere da Roma, 10 maggio 1884*, in P. BRAIDO (de), *Don Bosco educatore*, cit. 378-384.

を持つ人々、あるいは信仰を持たなくなった人々、その多くが若者であるこれほど数多くの人々に関わる家族は、教会の中にほかにないかもしれません。

- このことは、あかしと福音宣教の可能性に恵まれた、類ない宣教の途上に私たちを位置づけます。教会は、若者たちの未来が前途に広がるこの前線において、ただ歩を進めるだけでなく、先頭を行くようにと私たちに求めています。

✓ 共に生きられる信仰。自分の殻から外へと向かいながら

- サレジオのすべての司牧活動の霊的次元は、適格に、二項対立に陥ることなく生きられ、示されなければなりません。この世において私たちの父性をとらえ生きるために、多くを放棄し、献身することが求められます。他者と共に、人類の兄弟愛のあかしとして。それは、同じ神の子どもであるという認識をもって他者と接する、福音的理由です。他者を兄弟姉妹と呼び、そのように接することは、神を父と認めることであり、神を父と認めることは、他者を兄弟姉妹と見なすことです。
- この総合のうちに、あらゆるキリスト教霊性の礎を私たちは見ます。この世を神との出会いの場とし、神との出会いを、より良い世界を築く機会とすることに献身する霊性です。
- 教皇フランシスコはこのことにおいて、次の言葉で私たちを助けてくれます：「神と会うことを『恍惚』と呼ぶのは、神の愛と美に圧倒され、自分が自己の殻から出て高みに上げられるからです。ですがわたしたちは、一人ひとりの中に秘められた美、尊厳、神であり御父の子であるかたの似姿としてのすばらしさに気づくことでも、自己の殻から出る恍惚を経験しうるのです。聖霊は私たちが、自己の外に出るよう、愛の心で他者を抱きしめ、その人の幸せを追求するよう、駆り立てておられます。ですからやはり、ともに信仰を生きるほうが、共同体での生活を通してほかの若者たちとともに、愛情を、時間を、信仰を、悩み事を分かち合い、愛を表すほうがよいのです。教会は、共同で信仰を生きるための実にさまざまな場を提供しています。一緒ならば、何ものが軽くなるからです。」¹⁰
- これは、交わりの教会論をより熱心に生きるようにとの真の招きです。その交わりにおいては、それぞれの生き方の身分（訳注：信徒、奉獻生活者、司祭など、それぞれの召し出しにのっとった身分）において、賜物である一人ひとりが、また一人ひとりが持っている賜物が、外に向かって‘出かけて行く’ものとして、まずいちばん近い人々に手をさしのべながら、他者に‘与えられる’とき、奉仕となるとき、最大限に見いだされ、大切にされます。

¹⁰使徒的勧告『キリストは生きている』ChV 164.

2. 誠実な社会人

✓ 若者たちは、「いのちの家」で私たちが待っている

- 広い視野をもって眺めるなら、若者の期待がますます差し迫り、劇的なものになっているのがわかります。今日ほど世界の若者の人口が多かったことはかつてなく、また、今日ほど、「貧しく、助けを必要とする」若者の割合が、数においても、そしておそらく生活の状況においても、多かったことはかつてなかったと、確かに言うことができます。
- しかしながら、ドン・ボスコが定義したように、社会の「最も繊細で尊い層」がそこにあるのです。したがってそれはサレジオ家族にとって大きく開かれた働きの場ですが、それに目を開くよう、私たちは助けられなければなりません。
- さまざまなサレジオの場で、安易に“壁の中に”とどまるリスクがあると思います。向こうから来てくれる人々と関わることで満足しながら。
- そのため、若者の大きな叫びによって求められているのは、出かけて行き、彼らが抱える“現実の”問題に向かい合うことです：生きることの意味、人生の機会、養成・勉強の機会、仕事の機会の欠如など……

✓ 私たち自身と若者に、社会人としてのあり方、社会的責任を教育する

- シノドス（3回にわたる）の文書から浮かび上がるように、若者たちが預言者となっている正義、社会人としてのあり方があります。それは若者たちの属する国を超えるものです。各国の法制度や政府が表明するものを超える、より大いなる正義があります。世界の市民としてのあり方があります。すべての人の共通の家、未来の家である世界、それは私たちのものであるよりも、まちがいなく新たな世代のものです。
- 私たちは、この多くを要求される正義のビジョン（『ラウダト・シ』、『福音の喜び』）を持つ勇気を、自らに教育しなければなりません。それは持続可能な発展を目指すものです（国連の持続可能な開発目標；さまざまな包括的国際協定、特に最近の移住・移民に関わるもの。恥ずべきことに、一部の国々はこれに署名しませんでした）。
- また私たちは、同じ分野でより狭い利害に重きを置くより短絡的なビジョンがある中で、自分たちの声が聞かれるように努めなければなりません - 最も若い人々の環境問題への感性、これらの問題に対する多くの政府の扉を閉ざしたような姿勢に目を向けましょう。

- 今日、世界には信頼に足るリーダーが欠如しています。このこともまた、私たちの教育の歩みに問いを投げかけます。

✓ 政治的取り組みと奉仕のために自分たち自身を、また若者を教育する

- このことにおいては、教会として、サレジオ会、サレジオ家族として、回復すべき失地は多いと私は思います。このことは、あらゆる文書で、繰り返し、多かれ少なかれ強調して訴えかけられていますが（シノドス、総会など）、実際、この取り組みの“マグナ・カルタ”と言える「教会の社会教説」は、教育・司牧活動の中でやや“シンデレラ”のような扱いを受けています。
- 私たちの事業の最終目標が、背後に横たわる社会-経済モデルに何の疑問を投げかけることもなく、高度な競争社会に向けて最高の学歴を身につけた卒業生を“生産する”ことで本当にいいのかと思いつらぬ若者、サレジオ家族の若い修道者たちが、私たちの各地の支部にはいます。
- この点は、ドン・ボスコのアプローチから発展した違いがより感じられるものでもあります：まさに今日、ドン・ボスコの精神に忠実であるために、私たちはドン・ボスコの表現と正反対に近い表現を使わなければなりません。主の祈りは、個人としてだけでなく、グループとしても、共通善の主演となることを若者に教えるよう、私たちに求めます。行政、政治そのものの分野においてさえも。
- 政治的な奉仕の意味を、私たちはよく理解しなければなりません。そしてキリスト者として、いかに譲れないものがあるかを。
- それは、特にこのメンタリティーをもって成長して来なかった私たち奉獻生活者にとって“長い闘い”になるでしょう。しかしこれは、世の叫び、今日の若者の叫びなのです。
- 光となっているのは、ボランティア活動です。社会を変える、より責任ある取り組みへの、漸進的な、教育的な道となっています。

✓ 自分たち自身と若者を、誠実な生き方へと教育し、腐敗に陥らず自由にいられるように自らを守る

- この分野におけるサレジオ家族の可能性は実に大きなものです。“この世”の中に生きるサレジアニ・コオペラトーリと同窓生の生活、政治や影響力のある分野におけるその存在も、同様です。
- これは、私たちの内的一貫性への力強い招きです。特に協働者との関係において。

- このことはまた、社会倫理の文化を生み出すため、あるいはより目に見えるものにするために歩を進める機会にもなります。
- ✓ 絶えず変動する世界に、移民の世界に敏感であること、共に責任を担うこと
- 若い移住者は、ドン・ボスコのオラトリオの最初の受益者でした。
 - 歴史上かつてないほど大きな現象となっている移民、その大多数は若者です。これは、あらゆる大陸に最も大きく広がるサレジオ家族への、直接的な呼びかけではないでしょうか？ 私たちはこの分野で、**専門家**となるべきではないでしょうか（技術や哲学の分野で行われているように、“高等教育”に投資することによって）？
 - 将来、ますます広がるであろう人間の生活のこの開かれた前線に“文化を生み出す”のが私たちでなければ、ほかに誰がそれをするのでしょうか。教会の中で、誰がこの前線でより預言的になれるのでしょうか？ カルトジオ会でしょうか？
 - 我らが**サレジオ青少年運動 SYM**を**移動する若者のための運動**として考えるのは、突飛なことではないと、私には思われます。
- ✓ 若者たちが求めるように、共通の家の世話をすること（ラウダト・シ、13)
- 共通の家に対する責任（『ラウダト・シ』に提起される環境問題のビジョン）は、付け足しのような責任ではありません：私たちの文化、信仰、生活様式、ミッション……教育と福音宣教の全体に問いを投げかける地平です。新たに発明することはあまりありません。なぜなら、そのための（環境問題についても、未成年の権利についても）たどるべき方向性は、すでに長年にわたり教会の教導職によって明確に示されており、今、教皇フランシスコによって力強くたどられているからです。私たちは、どのように回心できるのでしょうか……？
 - 総合的環境論は、全人教育の提案（その人間的・霊的価値観において）をも、私たちに語ります。
- ✓ 人権、特に未成年の権利の擁護において

- 私たちがサレジオ家族として、ドン・ボスコのうちに聖霊によって興されたのは、私たちの人生すべてを子ども、若者、世界の少年少女に与えるためです。その中で優先されるのは、何よりも、自らを守る術を最も持たない、最も助けを必要とする、最も弱い、最も貧しい子ども、若者たちです。
- このため、私たちは、あらゆる人権、特に未成年の人権の擁護の専門家にならなければなりません。そして、そうではなかったことのために、涙を流すほどゆるしを乞わなければなりません。私たちは、いかなる虐待の共犯者でもあってはなりません。虐待とは、「若者、信仰そして召命の識別」のシノドスが定義したように、「権力による、あるいは経済的な、良心の、性的な」¹¹ 虐待です。

3. 私たちの母、マリアの助けにより

ドン・ボスコの教育法におけるマリアの存在には、私たちが見過ごしたり、おろそかにしたりできない、基本的な重要性があります。

ドン・ボスコは子どもたちに、無原罪の方、自分のための神の計画を喜びをもって生きた、飾らない柔和な女性としてマリアを示しました。ドン・ボスコはまた、キリスト者の扶け、愛情あふれる母としてマリアを示しました。神が一人ひとりのために抱いておられる夢を、息子、娘たち皆が十全に生きることに心を砕いておられる母です。

少年少女、若者、サレジオ家族の教育者、福音宣教者である私たち皆を助ける教育という観点から、マリアの存在は、ただ信心の次元だけでなく、“政治的な”次元も備えています：マリアは、神への献身、被造世界への責任を十全に生きるよう息子、娘たちを助ける母なのです。これが、「主の祈りの政治」なのです。

キリスト者の扶けなる我らの母が、私たち皆のために取りなしてくださいように。

2019年7月24日 ローマ

総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父 S.D.B.

¹¹ DF 30.